「考現学」の可能性

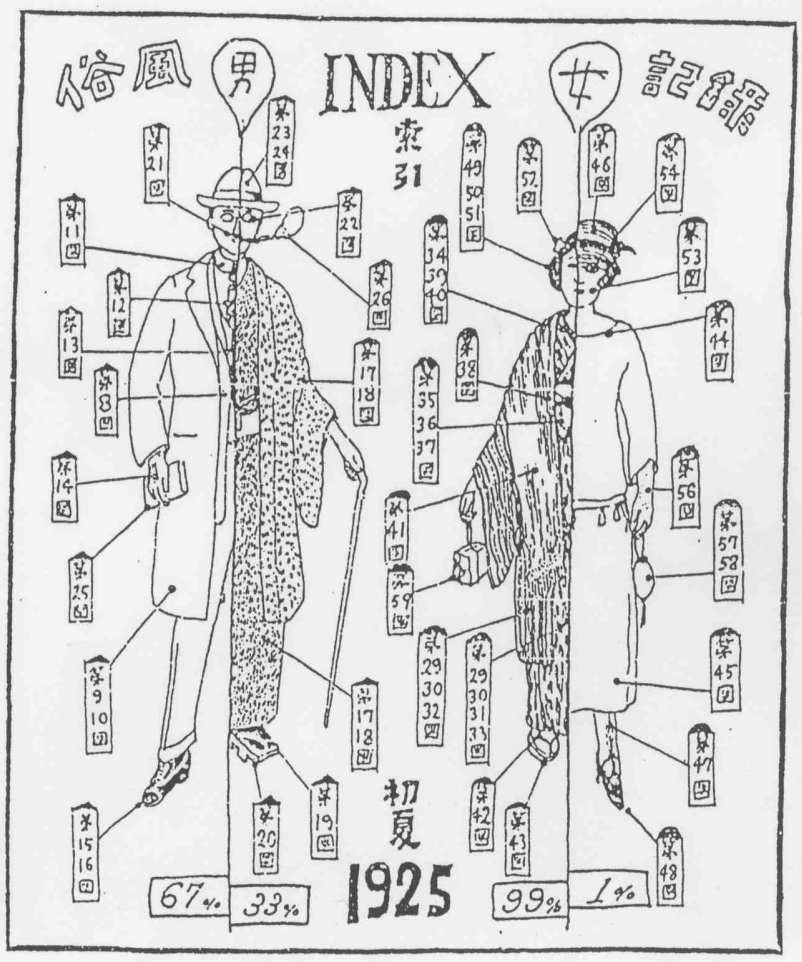
今和次郎生誕一〇〇年によせて

井上 忠司

日本生活学会や現代風俗研究会、あるいは路上観察学会などの活動によって、改めて今和次郎氏が昭和初期に拓いた「考現学」の方法が注目されている。ことしは、ちょうど今和次郎生誕一〇〇年にあたり、また日本生活学会の一五周年にもあたるが、これを記念して「考現学は、今」という展覧会が東京・銀座の東京ガス・銀座ポケットパークで八月二日まで開かれている。そこで、社会の表層にあらわれた風俗を採集しながら、生活の変化を記録し、その実態を解明するという「考現学」の方法を築いた今和次郎の仕事と、その意義について、甲南大学教授の井上忠司氏に論じてもらった。

（編集部）

☆いのうえ・ただし氏は甲南大学教授・文化心理学専攻。京大大学院修了。著書に「風俗の社会心理」など。一九三九（昭和14）年生。



『モデルノロヂオ』の統計図索引。1925年当時、銀座でも女性の洋装は1%だったことがわかる——同書復刻版（学陽書房刊）から。

考古学の方法を現代に適用する

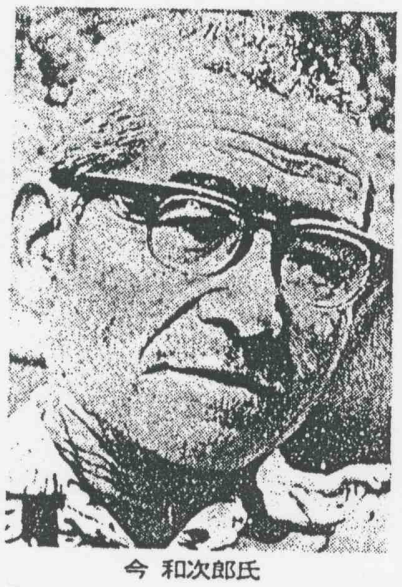
このところ、考現学がしずかなブームをよんでいるらしい。私も正統派ファンのひとりとして、もっぱら外野席から声援をおくりつづけてきた。うれしいことである。

ブームの火つけ役は、なんといっても、「路上観察学会」という名のユニークな団体であろう。

赤瀬川原平・藤森照信・南伸坊らの『路上観察学入門』（筑摩書房、一九八六）をよむと、かれらの活動は、考現学の方法にしっかりと根ざしたものであることが、よくわかる。『××考現学』などと名ばかりで、創始者とおよそ無縁のエセ考現学とは、ちょっとわけが違うようである。

考現学は、関東大震災の直後の東京で、バラックのスケッチからはじまった。一九二三（大正十二）年九月のことである。

創始者の今和次郎は、吉田謙吉をともなって、見わたすかぎりの焼野原を、地下足袋をはいて歩きまわっていた。美校（現在の東京芸大）の図案科を出たふたりが手にしていたものは、ノートと鉛筆とだけであった。



今 和次郎氏

〝平和な焼野原〟に復興の気運

大震災直後のバラックが原風景に

小型のカメラなどというものは、まだ登場していなかった時代のことである。ときに和次郎は三十五歳、謙吉は二十二歳であった。

謙吉の証言によれば、和次郎は、はやくもそのころ、みずからの立場を「考古学者なみ」と称していた。そして、ふたりの仕事を「昆虫学者の昆虫採集みたいなもの」と評していた、という。

やがてふたりは、復興なった銀座通りにのりだして、都市風俗を観察し、記録するようになった。考古学でなされた〝方法〟を現代に適用して、眼前にみる風俗を〝採集〟しようとしたのである。

当時の銀座は、わが国における時代風俗のショーウインドーでもあった。——そんな銀座の街頭に立ちながら、和次郎は現代風俗の考古学者（つまり考現学者）たらんとし、謙吉は都市風俗の採集家たらんとしたのであった。

ちなみに、「路上観察学会」の始祖ともいうべき存在は、むしろ吉田謙吉のほうであって、かならずしも今和次郎ではないようにおもわれる。あくまでも「実用性からズレた面白さ」（藤森照信）に徹して、都市風俗を採集しつづけようとした謙吉こそが、かれらの父であり、モデルなのであろう。

柳田世相史と並ぶ「民間日本学」

「考現学」の名称は、一九二七（昭和二）年の秋に、新宿の紀伊国屋書店で「しらべもの（考現学）展覧会」がひらかれたとき、はじめて公的に登場したものである。その際、エスペラントによる Modernologio という世界語訳までも、いっしょに披露されたのだった。あそびごころも手つだっていたとはいえ、今和次郎の気宇まことに広大なるものがあった、といわなければならない。

展覧会にもまして、考現学の名を世にひろめることになったのは、今和次郎と吉田謙吉のコンビからなる単行本の出版である。『モデルノロヂオ（考現学）』（春陽堂）が公刊されたのは、一九三〇（昭和五）年のことであった。ついで翌年には、『考現学採集』（建設社）が刊行されたのである（現在では二さつとも、学陽書房からの復刻版がある）。

ところが、である。皮肉なことには、ちょうど同じころ、早稲田大学（建築学科）の教授であった今和次郎が欧米への視察の旅に出かけることになって、考現学はしだいにその姿をかくしてしまうのである。このあたりの事情については、川添登の『今和次郎——その考現学』（リブロポート、一九八七）に、くわしい。

考現学の火は、いったん消えてしまったのである。ふたたび燃えあがるには、戦後も一九七〇年代の、いわゆる高度経済成長の成熟期まで、またなければならなかった。じつに四十年もの歳月を要したことになる。

わが国は明治以来、世界のなかでも、世相・風俗の変化がとびぬけてはやい社会である、といわれる。この変化をとらえようとするところに、今和次郎の考現学がうまれ、柳田国男の世相史のうまれる原動力があった。考現学も世相史も、ともに自まえの問題意識と方法に根ざした、純然たる「民間日本学」（鶴見俊輔）だったのである。

周知のように、柳田国男は、自分の生家のことを「日本一小さい家」とよんだ。農村を採訪とする柳田の学問には、このかれの生家が、〝原風景〟をなしているようにおもわれる。

いっぽう、都市を採訪とする今和次郎の学問（とりわけ考現学）には、大震災の直後のバラックが、その〝原風景〟をなしている。そこには、ジャンパーに身をつつみ、大衆の生活文化のしたたかさに打たれながら丹念にスケッチしている、和次郎の姿がある。ジャンパーは、おそらく、いつも自分の身の丈を低くかまえる姿勢をとりつづけた和次郎にとって、ノートや鉛筆などと同様に、必須の用具であったにちがいない。

現代史に参加する自覚と実践の喜び

戦後も一九六〇年代をむかえて、わが国における世相・風俗の変化のスピードは、いちだんとはやくなった。伝統的な民俗はどんどん解体していった。かわってあらわれた新しい風俗も、定着するよりまえに、もうつぎのものが顔を出す、といった有様である。

都市化の波は、日本列島をはげしくゆさぶってきた。あたかも日本国じゅうが、大震災にみまわれつづけてきたようなものである。われわれはいま、平和な焼野原に立っている、とでもいえようか。——ふたたび考現学の復興の気運が生じはじめたとしても、ふしぎはない。

七〇年代にはいると、旧来のイデオロギーや学問では、もはや世相・風俗を説明することができないことは、いよいよ明白となった。既成のイデオロギーへの不信と、眼前の事実をなんとか説明しようとする衝動が、人びとのあいだに、あちこちでふき出しはじめたのである。

折しも、一九七一（昭和四十六）年の正月より、『今和次郎集』（全九巻、ドメス出版）の刊行がはじまった。第一巻は、むろん『考現学』であった。

梅棹忠夫は、その「解説」のなかで、今の考現学を、柳田の世相史とまったく対照にすえて、たかく評価している。そして、こんご日本人の生活についてしんけんに考えてゆこうとすれば、このふたつは「発想の二大源泉」となるであろう、ときえ説いているのである。——これは、いわば考現学の独立宣言であり、復興宣言でもあった。

翌七二年には、今和次郎を会長に、川添登らを中心とする「生活学会」が誕生した。さらに七六年には、桑原武夫を会長として、多田道太郎、鶴見俊輔らを中心とする「現代風俗研究会」が、京都にうまれた。

いまや全国各地には、「路上観察学会」のほかにも、さまざまな研究グループがうまれているのである。たとえば、名古屋には「野外活動研究会」があって、岡本信也らを中心に地道な活動がつづけられている。

考現学は、解釈をうんぬんするまえに、どこまでも観察と記録に徹しようとする「方法の学」（今和次郎）であった。しかもその方法は、だれにでも開かれているのである。

考現学のめざすところは、一種の現代文化史であり、現代生活史であろう。

われわれはいま、現代史を生きている。生活者としての立場から、われわれが眼のまえの事実を観察し記録しようとすることは、われわれ自身が現代史の一部に参加することにほかならない。考現学の可能性は、いつにかかって、その自覚と実践のよろこびにある。

考現学がいま、おもしろい。

ことしはちょうど、今和次郎の生誕百年にあたっている。今の学問が、いま、再評価されようとしている。私は息をひそめて、そのゆくえを見まもっているところである。